# この画面の向こう側

+*柚貴*+

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
この画面の向こう側

【Ｎコード】
Ｎ５９９２Ｆ

【作者名】
＋＊柚貴＊＋

【あらすじ】
人に裏切られ、人を”信頼”することを忘れた僕―。しかしちょっとしたことでインターネットに興味を示し、そこで出会ったキミに恋をした。過去と現在の間で揺れ動く僕の物語。

## プロローグ（前書き）

初めて投稿する作品のため、なかなかうまくキャラクターを表現することができないかもしれませんが、それでもよければ読んでください。

これから頑張って、よりよい作品を投稿できるようにいたしますので、どうぞ暖かい目で見守ってください。それではどうぞ。

# プロローグ

【プロローグ】
人を信じること―。
それは今の僕にとっては何よりの恐怖だと思う。
人間というものは裏切り、憎しみ、そんな感情ばかりで生きているのだと思うからだ。
僕はかつて、一番の親友だと思っていた奴から裏切られ、心をズタズタに引き裂かれた。
そのとき初めて僕は知ったのだ。人と人の付き合いなんて所詮馴れ合いなんだと。
それ以来僕は”信頼”なんて甘ったるい戯言を忘れ去った。いや、記憶のそこに封じ込めた。
所詮この世の中は他人なのだ。味方なんて誰もいやしないんだ。
だから僕はこれから先、一生一人で、ひっそりと、静かに、孤独に、生きていくと決めていた。
だけど、そんな僕は恋をしてしまった。
それは声しか聴くことのできないキミに。
イヤホンの向こうから聞こえてくるキミの声に、僕はときめいた。
それはとても馬鹿らしいことで、一般の人から考えれば異常といわれることだという事もわかっている。
それに、この人はどうあっても他人なのだ。信頼してはならない他人なのだ。
いつ裏切られるかわからないとても恐ろしい存在なのだ。
そうと頭でわかっていながらも、僕は彼女の声を聴くたびに心がドキドキした。
胸が苦しくて、頭がどうにかなりそうな、とても言い表せない甘い感覚におぼれていった。
僕は彼女がいなければ、生きていけないとも思った。

そうは言ってもやはり迷った。目の前にある２つの分かれ道。
勇気を出して彼女のほうに歩みを進めるか、諦めて今までどおり何もない静かで孤独な道を進むのか。
そして僕は、進む道を、歩みだす道を決めたのだ―。

## プロローグ（後書き）

最後までご精読ありがとうございました。
つたない文章で非常に申し訳ありませんでした。
これからゆっくりと連載していきますので
応援していただけるとありがたいです。
それではまた次の投稿でお会いできることを祈っております。

## 【第一章―スタートボタン】（前書き）

今回は本作品の主人公、将介のキャラがどんなものかわかればいいなと思い書きましたので、まだお話は進みません。
今回も拙い文章ですが、よければ最後まで読んでください。ではどうぞ。

# 【第一章―スタートボタン】

【第一章―スタートボタン】

「・・・暇。」

学校から帰ってきて、重苦しい学生服を無造作に放り投げながら、中学から使っている壊れかけたイスに体を預ける。

普段ならこの時間は、ひどくつまらない授業が終わり、大好きな空手をしているのだが、先日の試合で足を怪我してしまい、１ヶ月の部活禁止を医者から言い渡されている。

これまで部活に打ち込んでいたこの時間帯、もちろん勉強なんてするはずもなくただぼーっと無駄な時間を過ごすだけになっていた。

運動をしてはいけないという命令は、一日１００回以上スクワットをしないと落ち着かない僕にとって、まるで十字架に縛り付けられたような感じさえもした。

（あの時、あの野郎がメチャクチャな蹴りいれなきゃ、今頃ガンガン空手できたのに・・・。ついてないなぁ。）

とはいっても、自分がちゃんと防御しきれなかったのも原因の一つなのだが、人のせいにしてしまう癖が付いている僕には、こんなひねくれたことしか言えないのだ。

こんな文句は言いつつも怪我したものはしょうがないと諦めている、それよりもこの暇で何もすることがない無駄な時間をどう過ごすかが一番の問題なのだ。

（この前買った小説を読み返す・・・のは無理か。姉貴に貸したまま帰ってきていない。ゲームも持ってないし・・・。携帯はあるが、メールをする相手はいないし・・・。）

そんなことを考えていると、部屋のドアをノックする荒っぽい音がガンガンと聞こえてきた。

「将介、入るわよ。」

ドアをノックした犯人は母親だった。

ドアをゆっくりと開けて入ってきた母の腕の中には、少し大きめのダンボールの箱が握られていた。
「将介、はいこれ。」
母は、少し埃を被ったダンボール箱を机の上に丁寧に置いた。
「なにこれ？僕宛の宅配便・・・にしては古ぼけてるか。」
「パソコンよ、パ・ソ・コ・ン。」
「パソコンって、何でそんなハイテクツールが築７０年、いかにも歴史あります！って感じの我が家にあるのでしょうか母上。」
「母さんの同僚の人が新しいのを買い換えるからって古いものをくれたのよ。あんた暇そうだったし、母さんには使えないから、あんたにあげるわ。」
「ははぁ、ありがたき幸せぇ。」
「なにその言い方。運動できなくて頭でも狂ったの？」
ぺしぺしと頭を叩いてから、母は夕食の買出しに行くと言い、さっさと僕の部屋から出て行った。
いつも何をねだっても「ダメ、どうせ時間の無駄になるだけよ」といって取り合ってくれなかった母から、以外な贈り物が届いた。
（それにしても・・・。やっと我が家にパソコンが来たのか。昭和の三種の神器しかなかったからなぁ・・・。）
うっすらと埃を被り、弱々しく置かれたダンボールをさっさっと適当に払ってから、これでもかといわんばかりにはられたガムテープを力任せにバリバリとはいでいく。
（まったくっ！一体何重にテープ張ってんだよ！）
何重にも分厚く重ねられたガムテープの封印をやっと剥がし開いたダンボールの中には、
まだ中古というにはキレイすぎるほどの白いノート型パソコンとボロボロになった説明書、
それとよくわからないコードが数本ひっそりと入っていた。
僕はすこし端のほうに折れ目があったり、コーヒーと思われる茶色いしみが付いた説明書に軽く目を通して、そこに書かれたてあると

おりにパソコンの起動ボタンを恐る恐る押してみた。
しかしパソコンは、ダンボールに入っていたときと幾分も変わらない様子で、黒い画面を僕に向けるだけでウンともスンとも言わない。
（あれ・・・これ壊れてるんじゃないのか・・・？）
今度は説明書にじっくり目を通し、訳のわからない文章を見ているうちに電源が入らない原因を探り当てた。
電源コードを挿していない―。
唯それだけだ。
いくら現代の技術が目覚しい進歩を遂げていても、肝心の電気がなければ動くはずはない。
自分の犯した、超初歩的なミスに心の中で赤面しながら、ダンボールに入っていた電源コードを本体にぐっと挿し込み、そっとスタートボタンを押してみた。
ウィィィ―。
不思議な音に聴こえた―。
それはまるで、生まれたばかりの子供のように、パソコンが息を吹き返した。また使ってくれることを喜んでいるかのように僕にはそう聴こえた。
なぜだろう・・・。
起動した、唯それだけのことなのに、なぜか僕の心がソワソワした。
いつも、何があっても揺れることのなかった僕の心が、パソコンが起動しただけで、新しいおもちゃを貰った子供のようにときめいた。
（学校の授業で使ったことあるけど、落書きするくらいしかできないんだけどな・・・。ちゃんと使えるかな。）
下手に触ると壊れるんじゃないかと、年寄りが考えそうなことを考えつつ、説明書にびっしりと書かれた意味のわからない専門用語と格闘してすることにした。

結局最初の設定が完了し、使えるようになったのは作業開始から2時間後のことだった。

パソコンを貰ったころはまだ夕焼けに照らされて、淡いオレンジ色だった空は、冬の夜の荒涼とした深い藍色に変わり、あたりは月明かりとチラチラと点滅する街灯に照らされていた。
ふぅっと深いため息をつき、ずっと慣れないキーボード操作をしてカチカチに凝った肩をグルグルと数回まわして、それでもなんとかパソコンを使えるようにした小さな達成感を一人でひそかに噛み締めていた。

## 【第一章―スタートボタン】（後書き）

最後までご精読いただきありがとうございました。
これから将介はインターネットを始めるわけですが、それはまた次回以降書いていこうと思っております。
よければこれからも読んでください。
そしてアドバイスをいただけるとすごくうれしいです。

## 【第二章―過去の鎖】（前書き）

今回は将介の”過去”について書いてみました。
なぜ将介が信頼という感情を忘れたのかを書いて見ます。それでは
どうぞ。

# 【第二章―過去の鎖】

【第二章―過去の鎖】

夕食を食べ終わってからも、僕はずっとパソコンいじりに没頭していた。

何回も何回も説明書の読解不能な単語達に悩まされたが、それ自体が楽しくて、手を止めることはなかった。

久しぶりに心がワクワクして、そんな心が僕にまだあったことに少し驚き、戸惑いながら作業を続ける。

どれくらいパソコンの画面を見つめていたのだろうか、いつの間にか時計の針は深夜の１２時３０分を指していた。

（あぁ、もうこんな時間か。つい楽しくてやりすぎたな。明日も学校だしそろそろ寝ないと）

そうは思いつつも、もう少しもう少しと言い訳をしてパソコンで遊び続けた。

そうするうちに、僕は激しい睡魔に襲われ、その甘い誘惑に勝てるはずも無く、机に突っ伏した状態で、ゆっくりと深く暗い闇に意識を沈めていった。

深い藍色の闇に沈み行く意識とは反対に、何かが僕の頭の中から漏れ出して、最初はおぼろげに映っていたその景色が次第にはっきりと、冷酷なまでに忠実に、僕を”過去”の世界へと誘った。

僕は一人でいつも通る通学路をトボトボと歩き、いつものように学校に向かっていた。

ただ一つ普段と違うことといえば、いつも一緒に登校している幼稚園からの友達であるシンちゃんがいないことくらいであった。

シンちゃんの家に行くと、いつもはシンちゃんが立っている家の前に、シンちゃんのお母さんが立っていた。

「おばさん、おはようございます。」

「将介くんおはよう。」

おばちゃんは、いつもと変わらない優しくてほんわかとした笑顔で挨拶を返してくれた。
「おばちゃん、シンちゃんは？もしかして風邪引いたの？」
「違うの。今日は学校で委員会の用事があるからって早く学校にいったのよ。ごめんね。」
「わかりました。じゃあ僕も行きますね。」
「気をつけていってらっしゃい。」
おばちゃんは少し申し訳なさそうな顔をしながら、手を振って僕を見送ってくれた。
（用事があるなら、昨日言ってくれればいいのに。）
そんなことをぼやきながら、一人でとぼとぼと枯葉を蹴りながら学校に向かう。
それから２０分ほどで学校に着き、寒さで凍えてかじかんだ手を暖めるために、急ぎ足で暖房の効いた教室に向かう。
階段を上り、教室の前に着くと、すでに何人かのクラスメイトが登校し、ドアの近くにある一つの机を囲んでひそひそと何かを話しているのが見えた。
そのグループの中にはシンちゃんの姿もあった。
僕は静かに教室のドアを開け、シンちゃんがいるところにスタスタと歩いていった。
「シンちゃんおはよう。」
いつものように声をかけるが、シンちゃんは気づいていないのかピクリとも反応を示さない。
もう一度声をかけようとしたとき、ふいにシンちゃんはスッと席を立ち、隣に座っていたクラスメイトに声をかけ、いそいそと二人で教室の外に出て行ってしまった。
いつもとなにか様子が違うシンちゃんの反応を不思議に思いながらも、教科書の詰まったズシリと思いカバンを下ろすために、教室の窓側にある一番奥の自分の席に向かった。
しかし、自分の机を見た瞬間、僕はその場に氷漬けにされたかのよ

うにカチリと動けなくなった。
昨日まではあれほどキレイだった僕の机は、黒い油性マジックで書かれた”死ね”や”クズ”という、これまで見たことのないような、おぞましく、淀んだ字で埋め尽くされていた。
ピタッと動けなくなった僕の後ろからは、クラスメイトの冷ややかで冷酷なクスクス笑いが聴こえてくる。
そこでようやく僕の頭は機能を回復した―。
それと同時に、これまで感じたことの無い、煮え滾るような怒りがグツグツと腹のそこから湧き上がるのを確かに感じた。
「・・・なんで！！！なんでこんなことするの！！！」
僕はクスクス笑いを止めないクラスメイトに向かって、猛烈な勢いで駆け寄り、荒々しく机を叩きつけながら聞いた。
すると今度は、クスクス笑いではなく腹を抱えてゲラゲラと笑い出したのだ。
「何がおかしいんだ！」
「あのさ、お前がしゃべると菌が飛んで汚いから近寄らないでくれる？」
顔を真っ赤にして叫ぶ僕に、今度は無表情な真顔になったクラスメイトが冷ややかに言い放った。
その言葉を聴いた僕の理性は、とうとう腹の奥底から湧いて出る熱く滾るものに飲み込まれた。
そこからの記憶は霞がかかってるような、ぼんやりとしたもので、よく思い出せない。
確か担任の先生が駆けつけてきて、事情を聞かれたりした気がする。
ただ唯一鮮明に覚えてることがある、それは頭から血を流し床にうずくまっているクラスメイトと、コブシを握り締めて、目を見開いた僕が立っているところだけである。
　そこまで見たところで、僕の意識は何かに引っ張られるかのように急激に現実の世界に引き戻されていった。
（・・・嫌なこと思い出しちまった・・・。クソッ！気分悪い・・・

。）

いつもより早く目覚めてしまった僕は、寝ているときに掻いた冷や汗を流すために、ゴソゴソと下着をとり、風呂場に向かった。

## 【第二章―過去の鎖】（後書き）

今回も最後までご精読いただき、ありがとうございました。
物語が一向に進む気配がないという声がきこえてきそうですが、自分の文才ではなかなかリズムよく進むことができません。申し訳ありません。
これからも少しずつ物語を進めていきますので、よろしければ読んでください。

## 【第三章―教室】（前書き）

さっそく創作意欲がなくなりかけてます。

## 【第三章―教室】

【第三章―教室】

シャワーを浴び、朝食を簡単に済ませた僕は、家の駐車場に止めてある愛車、もとい自転車の鍵をカチャリと開け、肌寒い朝の空気を頬に感じつつ学校を目指す。

学校に近づくにつれ、僕の顔は表情や感情といったものを失い、”他者”と接するための偽りの僕になっていく―。

僕は人に素を見せることを恐れ、嫌う。それは半分反射的にしている行為なのだ。

過去の鎖は僕の中にいくつもの影を作り、その影を接する相手によって変える―。

僕が通っている高校は、自転車で２０分ほど行ったところにある。学校は山の中腹に建てられており駅も近くに無い為、ほとんどの生徒が自転車で登校している。

中には家から１時間自転車を漕いで登校している奴もいる。

冬の今頃の時期は、あたりの畑に霜が降り、朝日を浴びてキラキラと白く澄んだ光を、冷えて赤く染まった生徒の顔に投げかけている。

僕はこの景気が嫌いではなかった。

しかし、学校という、他者から形成される集団に向かっていると思うと、どうしても好きになることができず、キラキラとした光は少し鬱陶しいものに感じた。

駐輪場に着くと、張りのある元気な挨拶が聞こえてきた。

「よっ、将介。今日も機嫌悪そうだな。」

「うっせぇよ。いつもと変わらん。」

大きな体とは対照的な、人懐っこい顔の男子が一人近づいてくる。

こいつは僕が所属している空手部の主将で、名前を藤堂優佐久（トウドウ ユウサク）という。こいつは僕の”素”に限りなく近いものを見ている唯一の人間だ。
僕は、なぜかこの藤堂にだけは、心を開いてもいいと思っている。
彼には、人と打ち解けるオーラのようなものが出ている気がした。
しかし、やはりそれが怖い僕は、影を薄くはするものの、完全に素は見せていない。
　そんな藤堂と適当な話をしつつ教室に入ると、すでにほとんどの生徒が登校を完了し、授業の準備を始めていた。僕は残念なことに、前回の席替えで一番前の席をひいてしまったため、席に着くまでに何人かの生徒にぶつかってしまった。
やっとのことで間をすり抜け、席に着くと後ろの席に座って本を読んでいた早見涼子（ハヤミ リョウコ）がおもむろに顔を上げ、声をかけてきた。
「おはよう壁谷君。」
彼女は去年も同じクラスで、たまに軽く会話をする程度の関係だったが、最近席替えで隣同士になってからよく声をかけるようになっていた。
「あぁ、おはよう早見さん。」
僕は適当に挨拶を返し、そこで会話を終わらせようとした。
いつも思うのだが、なんで、この早見という子は僕に話しかけてくるのだろうか―。
面白い話どころか、無愛想で適当な相槌しか打っていない僕に。
話を終わらせそうに無い早見さんに、いつもどおりの適当な相槌をウンウンと打ちながらも、僕はまったく別のことを考えていた。
　昨日見た夢のことについて―。
　あれは僕が小学４年生の誕生日の出来事だ。忘れるはずも無い。
あの日を境に、僕は、僕という人間は、人間を信用することを忘れてしまったのだから。
「ねぇ壁谷君、大丈夫？」
昨日に意識を飛ばしていた僕を、心配そうに見つめる早見がいた。

「あぁごめん。ちょっと気分悪くてぼーっとしてた。」
「気分悪いの?!無理しないほうがいいよ!」
「別に大丈夫だから。」
そう言ってもまだ心配そうに見つめてくる早見にもう一度大丈夫だということを伝えると、少し納得がいかない様子ながらも引き下がってくれた。
「あっ、そうだ壁谷君。壁谷君の家にパソコンある?」
見事なまでにタイムリーな質問を投げかけてきた早見さんの目は、よりいっそうキラキラとした無邪気な輝きをもっていた。その光は、僕にはとてもまぶしすぎて思わず顔を伏せてしまった。
「一応もってるけど、どうして?」
「あのね、壁谷君頭いいでしょ?私頭悪いから、その、勉強をおしえてほしいの。」
勉強を教えることと、パソコンが家にあるかという問いの関係性がまったくわからない。
「でも何で勉強を教えるのにパソコンがいるの?」
「あのね、無料で通話できたり、ファイルを送ったりできるソフトがあるの!それを使えば、家に帰ってからも話を聞きながら勉強できるじゃない?」
それからしばらく、その無料で電話ができるソフトの説明を熱心にされたが、僕はいまいち乗り気じゃなかった。
仲良くもない早見さんと、1対1の通話など、到底僕に耐えられる行為じゃないとわかりきっていたからだ。
何も反応を示さず、ただジッと話を聞いているボクに、どうしてもその”ソフト”に興味を持ってほしいのだろう、
早見さんの説明はもはや街頭演説をする政治家のように僕にそのよさを伝えようとしている。
熱弁を止めようとしない早見さんに困り、どうすれば止めることができるのか考えていたが、どうやら僕から何かしなくてもいいようだ。

廊下からスタスタと足音が近づいてくるのが聞こえ、まもなく教室のドアがガラッと開き、大柄な体の担任が入ってきた。
担任が入ってきたことにより、早見さんは演説を中断するしかなく、少し残念そうな顔を見せて、また後でねと一言声をかけてから乗り出していた身を引き姿勢を正した。

その後はいつもどおり、1時間目から昼休みまで永遠と寝続けた僕は、その後もソフトについての演説を続けようとする早見さんを振り切り、いつも一人でいる屋上に向かった。

## 【第三章―教室】（後書き）

乏しい才能を振り絞りがんばります。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5992f/

この画面の向こう側

2010年10月9日00時08分発行